

日韓 橋を架ける

草の根の交流で日本と韓国の関係をつないでいる人たちがいる。韓国大法院（最高裁）が元徴用工への賠償を命じる判決を日本企業に出してから2年。判決を機に政府レベルの関係は冷え込んだままで改善に向けた兆しが見えないが、文化やスポーツを通じ、日韓をまたにかけて活躍してきた4人は、自らの経験を振り返り、何を思うのか。朝日新聞と韓国の東亜日報の記者が共同で取材し、同じ内容のインタビュー記事を掲載した。

言葉じゃない 国籍超える演技

俳優 シム・ウンギョン さん



日本でも活動するように、岩井俊二監督の時にJ-POP、その後、は日本文学まで好きになりました。そうして、日本の作品に私が入っていくと、何回も繰り返して聞いて、抑揚を身につけてから、自分の感情をのせて、練習しました。

言葉の問題は？
まず知人に頼んで、セリフを録音してもらいました。何回も繰り返して聞いて、抑揚を身につけてから、自分の感情をのせて、練習しました。

26歳 韓国・江原道生まれ。子役としてデビューし、「サニ」永瀬の仲間たち、「屋」彼女、など韓国で多くの映画やドラマで活躍。17年から日本でも本格的に活動を始め、「新聞記者」「ブルーアーワ」などに出演。山本和生撮影

若者たち 文化愛でつながる

映画監督・作家・音楽家 岩井俊二 さん

監督が「第二の故郷」と語る韓国。その縁は1998年の釜山国際映画祭で「四月物語」が上映された時に初めて韓国に行きました。会場で「Love Letter」を見たことあります。もう、観客のほとんどが手を挙げたんです。韓国では未公開でしたが、ビデオで出回っていたようで感動を受けました。

そのキャンペーンや取材であらためて韓国を訪れました。当時はまだ日本の大衆文化が一部しか開放されていなくて、移動の車の中、向こうのスタッフは「日本語はまだテレビでは放送できないんだ」と言っていました。また、壁がある関係なんだと、はっとさせられました。同時に、そんな中で日本の映画が公開され始めていることの意味も実感しました。

身近な何かを感じてもらえたのかもしれません。当時の韓国は、少しずつ開放され始めた日本の大衆文化がせきを切ったように流れ込んだような感じ。その恩恵にたまたまあずかっていた。韓国で愛されたことで今も映画をつくり続けられていると思います。

「Love Letter」は大ヒット。何が韓国人の心をつかんだのでしょうか。身近な何かを感じてもらえたのかもしれません。当時の韓国は、少しずつ開放され始めた日本の大衆文化がせきを切ったように流れ込んだような感じ。その恩恵にたまたまあずかっていた。韓国で愛されたことで今も映画をつくり続けられていると思います。

ナオ 競い合って励まし合った

元スピードスケート選手 李相花 さん

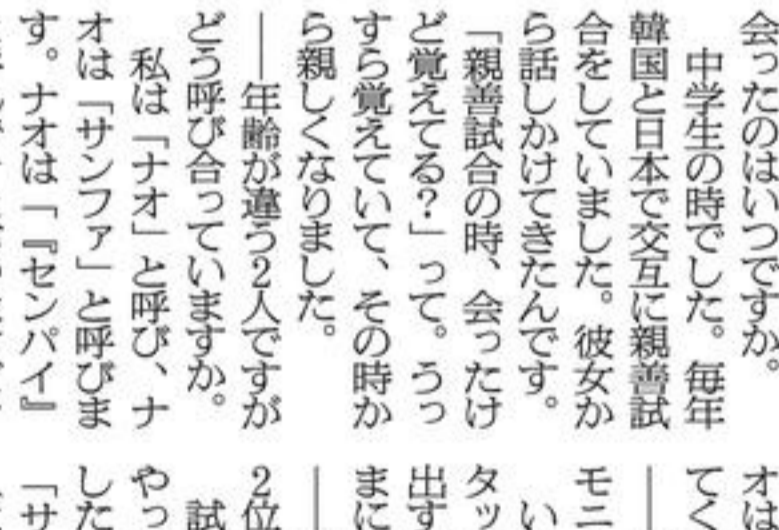
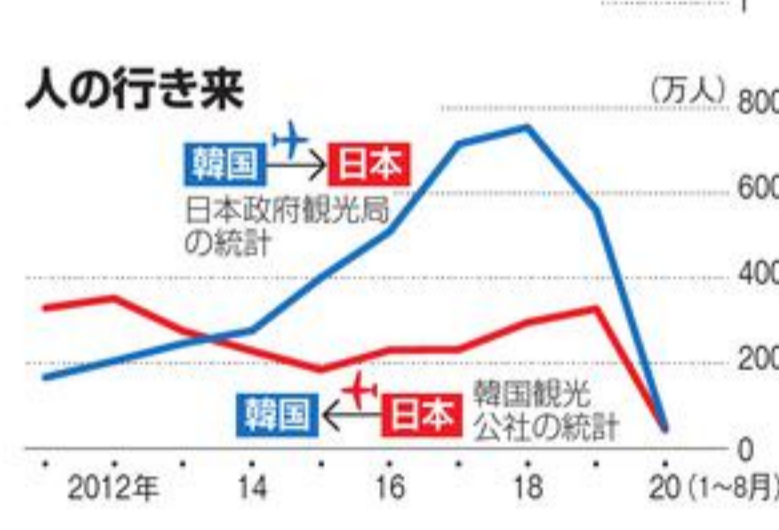


31歳 江原道生まれ。バンブー（10年）、ソチ（14年）の五輪で女子5000メートルを制し、平昌五輪（18年）では日本の平昌五輪選手34人に次ぎ、銀メダルを獲得。競艇終了後、小笠原選手と健闘をたたえ、合意が成立した。東亜日報・釜山撮影

平昌五輪で小笠原選手があなたを温かく抱きしめる姿が反響を呼びました。私たちがいつもそうしてきています。私が10年バンブー五輪、14年ソチ五輪で金メダルを取ったときも、ナオが私のところに来て握手し、抱きしめてくれました。当然のように祝福しました。私たちが競い合ってきたのは、お互いに励まし合ってきたからです。



平昌五輪で競技を終え、2位の李相花（左）を擁抱する小笠原選手



押しつけない 韓国球団で学ぶ

プロ野球指導者 伊東勤 さん



2012年、ソウルが本拠地の斗山ベアーズでヘッドコーチを務められました。なせ、韓国球界へ。

試合もして、強さを肌で感ぜました。韓国はどんな野球をやっているのかという興味もありました。韓国で感じた違いは？ 衝撃を受けたのは食事です。練習の合間にこんなに食べるのか、韓国ではある。それがとても大切なことだ。韓国では、食事を通して選手とコミュニケーションを取ることが大切だ。

58歳 熊本県生まれ。82年、西武ライオンズに入団。80、90年代のライオンズ黄金期に正捕手として活躍した。03年に引退。04、07年、西武の監督を務めた。13、17年に千葉ロッテマリーンズの監督、19年から中日ドラゴンズのヘッドコーチ